

報告書

2005年7月31日

債権者代理人 柳原敏夫



目次

- 1、 報告の目的
- 2、 交雑の可能性について
- 3、 近隣農民の同意または十分な理解について
- 4、 食経験のある物の遺伝子を用いて、食経験のある物の遺伝子を組み替えるから安全であるという理屈について

1、 報告の目的

本日（7月31日）の午後1時から、TBSのテレビ番組「噂の！東京マガジン」で、

「不安！遺伝子組み換えコメの実験に農民反対」

というタイトルで、本裁判の対象である債務者の本野外実験を取り上げた番組（以下、本番組という）が放映されました。この中に、今まで明らかにされなかった重要な証言・発言がありましたので、その映像を書証として提出すると同時に、以下、それについて簡潔に解説したいと思います。

2、 交雑の可能性について

本野外実験に反対する債権者側の主要な理由のひとつが、交雑の可能性があるということでした。この点は、疎甲の天明陳述書の 頁にも明らかにされている通り、たとえ1粒が交雑しても、そこからGM米が指数的に拡大するのであって、この1粒を決して甘く見ることができません。これが化学物質とは異なる生命現象に固有の特質です。したがって、この「交雑の可能性」に関する争点とは、

「果して、交雑の可能性が完璧に無いと言い切れるのか、それとも言い切れないのか」

と言い換えることができます。

ところで、本番組において、インタビューを受けた債務者の北陸研究センターの北陸地域基盤研究部長田中宥司氏は、「交雑の心配があるのではないか」

という質問に対し、

「花粉で交雑が起きることは、まずない」

と述べました。これは決定的な発言です（画面上も、彼のこの発言がテロップで流され、番組の後でも、コメンテーターによってくり返されました）。なぜなら、これは言い換えれば、

「交雑の可能性は九十数%ない。が、残りの数%の可能性は分からない」

ことであり、先ほどの争点に即して言えば、

「交雑の可能性が完璧に無いとは言い切れない」

ことを認めたものだからです。

しかも、この発言は債務者の本野外実験の責任者の発言です。

以上、今回の発言により、この論点は決着を見たと言ってよいでしょう。

3、近隣農民の同意または十分な理解について

さらに、前述の田中宥司氏は、「交雑の問題について、近隣農家の人たちは、納得しているのか」という質問に対し、

「隣接した農家に1軒、1軒回って説明して、そのリアクションは『頑張れよ』と言っていただいている」

と述べました。しかし、本番組スタッフは、自ら、近隣農家を取材し、その結果を放映し、その中に、本野外実験場にすぐ隣接する農家の声として、

「あんまり評判よくないよね、ああいうことやっちゃうと。……花粉飛んだりしないようにと言っているけど、やっぱり飛ぶんでないかな。……（債務者から本野外実験の）説明はあったけど、『そんなのダメだ』と言ったら、『いや、どうしてもパンフレットだけでも配らしてくれ』と言って持ってきた」

が放映されました。

ここから明らかなことは、債務者は、総論では、本野外実験の情報公開について、自ら

「適切な情報開示・提供

GM作物及びこれらを利用した食品について、国民の皆様のご理解が十分に得られているとは言い難い面もあり、例え研究段階の実験であっても、農林水産省の栽培実験指針では、より積極的に透明性をもった情報提供に努めることがうたわれています。

そこで、……本実験は一般に公開しながら進めていくことを原則としており、今後も見学会を開き、実験の経過の公開など、適切な情報公開・提供に努めま

す」(疎甲 15)

と、国民の理解が十分得られていない現状を踏まえ、「より積極的に透明性をもった情報提供に努める」ことを常々口にしながら、しかし、実際は、最も交雑の可能性があり、穂に野外実験の影響を最も受ける隣接農民の人たちに対しても、単に形式的に「パンフレットを配布した」既成事実を作ることしか念頭になく、GM イネの野外実験に不安を抱く農民の人たちの理解を得るために、「より積極的に透明性をもった情報提供に努める」姿勢が微塵もないことが明らかです。

以上、この隣接農民の発言から、「近隣町内会や農家に十分説明し、理解と応援を得られている」という債務者の主張(疎甲 9 の 2) が到底認められないことが明らかにされたと思います。

4、食経験のある物の遺伝子を用いて、食経験のある物の遺伝子を組み替えるから安全であるという理屈について

さらに、前述の田中宥司氏は、「遺伝子組み替え作物は今すぐ体調を崩すことはないにしても、将来、問題を起こす危険はないのか」という質問に対し、「(組換えに使う遺伝子を取り出した)カラシナの食経験があるということが、一番分かりやすいことかもしれない、安全であるということの」と、その安全性の根拠についていとも簡単に述べました。

しかし、この考え方は、個々の要素(ここでは食べ物)が安全だから、その要素を組み合わせたもの(ここでは遺伝子組換え作物)も当然安全だ、という未だ「科学的に明確に証明したデータ」もなしに語られる信仰或いは神話でしかありません(そのことは、本番組のコメンテーターたちすら気がついて、異論を述べています)。

ここでの問題とは、

「食経験のあるカラシナの遺伝子を用いて、食経験のあるイネの遺伝子を組み替えたとき、その結果出来上がった遺伝子組換えイネは安全といえるのだろうか」

より一般的に言えば、我々が申立書で書いた、

《ある特定の遺伝子を組み換えて、本来のゲノムから切り離し、別のゲノムに導入することは、機械的なパーツを取り替えることとは本質的に異なる。なぜなら、遺伝子はそのほとんどが発現(……)したあと、ゲノム中の他の遺伝子産物(……)と相互作用することによって、その機能を発揮するから、局所的

な遺伝子の組み換えによって引き起こされるすべての相互作用をあらかじめ予見することはほとんど不可能だからである。》(9頁2(1))

という問題として言い表すことが出来ます。

そして、今回の遺伝子の組み換えによって引き起こされる具体的な相互作用として、債権者が当初から主張してきた次のような問題があります。

- (1)、ディフェンシンの作用機構(人体への影響など)の未解明
- (2)、「ディフェンシンが食用部分には絶対に移行しない」実証データの不足
- (3)、ディフェンシンに対する耐性菌の出現の問題
- (4)、土壌微生物への影響の問題(以上、債権者準備書面(2)9~15頁)

しかし、上記問題の解明につき、債権者の再三再四の要求にもかかわらず、債務者は今日現在まで沈黙して答えません。もし、本番組のインタビューで表明したように、債務者が本当に「本 GM イネの安全性に問題はない」と言うのなら、上記問題に関する「科学的に明確に証明したデータ」を本裁判においてとっくに提出している筈です。

さらに、

「食経験のある食物の遺伝子を用いて、食経験のある食物の遺伝子を組み替えたとき、その結果出来上がった遺伝子組換え作物は安全といえるのだろうか」についても、既に、以下のような報告がなされています。つまり、これらは、導入遺伝子産物が食物由来であり安全が確認された物質だとかいっても、遺伝子組み換え技術による導入の結果、宿主作物全体で予想外の変化がおき、食べた動物に健康障害を引き起こすことがあるという実験例の報告です。

この点からも、債務者の言う安全性の根拠にはそれに必要な裏付けがないと言わざるを得ません。

(1)、遺伝子組換えポテトがラットに有害であるという実験結果

哺乳類には無害であることが確認されている殺虫成分を作る、マツユキソウから取られた遺伝子を用いて、ポテトの遺伝子を組換えて作った GM ポテトを、ラットに与えたところ、免疫力低下などを引き起こした。

出典:別紙1(1999年4月2日朝日新聞夕刊「科学 改造生物の時代 上 1 学者の発言、論争に」)

別紙2(市民科学研究所 1999年5月7日)

同 3(ザ・ガーディアン 02年6月22日)

(2)、GMポテト給食で栄養不足、実験承認にも不備というインドの報告

GM ポテトにアマランス（原産地は、南米アンデス地域で、ヒユ科の植物。16世紀メキシコで、とうもろこしなどと並び、原住民の主食であり、現在、穀物や野菜、また観賞用としても使用）の遺伝子を組み込んだタンパク質増強 GM ポテトでは、鉄・カルシウムの含有量が著しく少ないことが示された。このことから、リリースは、GM ポテトを学校給食で使えば、児童の鉄・カルシウム不足が広がり、栄養状態はかえって悪化するだろうと警告している。アマランスの遺伝子を組み込んだポテトよりも、アマランスのような作物の栽培と利用を増やすほうがずっと利口な選択だし、ともかくインドの豊かな生物多様性と料理からすれば、アマランスだけが蛋白源でもないと主張する。

出典：別紙4（農業情報研究所 03.6.16）

以 上

改造作物



時代の

上

昨秋、英蘭の研究家が作られた遺伝子組換え作物「ジャガイモ」を食べた豚が死亡したという報告が、スウェーデンの動物研究所のアーバド・バスターイ教授から、動物研究所のあるレクナという動物園のたんぽうくんの研究で、世界的にも知られた遺伝学者だ。作られた理由

は、ナスミに、遺伝子を組み換えたジャガイモを食べた豚は死亡した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。

「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。

1 学者の発言、論争に

波紋



モンサント社でも遺伝子組換え大豆が試験栽培されている。同社は「安全性評価を数回している」という。米ミズーリ州の同社研究センターで、石田啓す

を組換えたジャガイモを食べた豚は死亡した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。

「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。遺伝学者は「ジャガイモを食べた豚は死亡した」として公表した。

組換え作物を商品化するには、アレルギー誘発性や毒性などが排除され、安全性の確認を受ける必要がある。日本でも昨年、バスターイ教授の発表に基づいて「有毒な作物が食料として流通しないよう、政府が事前チェックしており、問題は無い」との結論を導いた。

一方、二月中旬、同教授の発表方法、結果をめぐって十三万頭の研究者二十人が「彼の結論に同意する」として、英蘭政府に組換え作物の調査を五年間、凍結するよう求めた。その一人、ドイツの分子生物学者、ヘントリクス・タムペーサーさんはロンドンで「二年前に組換え作物の安全性が、臨時調査委員会で「いまの安全性評価では、人体への長期的な影響はわからない」と断った。国際的な議論は終わっていない。

現在も世界状況にあるバスターイ教授は、二日に日報を助けたタムペーサーさんについて話した。二日、「私は、安全性評価の過程を監視しないと取り返しのつかないことになる」と断った。また「正式な論文発表の準備を進めていくつもりだ」とも述べた。この過程は、石田が担当します。

別紙

アリ
氏
ズ

アーパッド・プシュタイ博士が語る21世紀の食糧

英国ハンガリー フェローシップ主催

ポーランド・ハース・クラブ開催

ケンジントン南

5月7日1999年

アンジェラ・ライアン

訳 山田勝巳

市民科学研究所 (Institute of Science in Society)

注：講演者が話したことを正確に伝えるために一人称で記録している。講演者は内容が正確であることを認めている。

過去50年間、使う農薬の種類が増加してきており、今ではより以上に使わなければならなくなっています。それに環境と農民への負担を克服するためにバイオテクノロジーが求められています。DNAの発見以来、何故これが切り札になってきたのか主な理由が4つあります。農薬に抵抗力のある病害が増えてきており、殆ど全てのGM植物はこの範疇に入り、確かに利点はあるのです。収量、耕作時間、生育特性の向上が求められており、まだこの分野では製品が出ていないが第2世代のGM作物では栄養価の改善への要求があります。

GM作物は、今ではどこにでもあり、イギリスでは3種類しかスーパーマーケットの棚に出ないが、この技術を手に入れ事実上全てが遺伝子操作されています。モンサントのラウンドアップ除草剤に耐性のあるGM大豆、ノバルティスが作ったBt毒遺伝子のあるトウモロコシ、ゼネカのフレーバーセーバーでゆっくり熟して農家に便利なピューレ（訳注：トマト）等。GM植物を作るために、希望する遺伝子を挿入するには植物の持っている抵抗力を破壊しなければなりません。遺伝子工学者はこれをするのに色々な仕掛けをします。スイッチ；プロモーターで遺伝子をオン・オフする。遺伝子を取り込んだ細胞を選び出すために全部を上手く働くようにする。このためにレポーター遺伝子を使う。細胞を育てて組み換えが上手く言ったものを識別する。そのために抗生物質耐性遺伝子を使う。一個の遺伝子を入れるのではなく、一群の遺伝子が必要なのです。遺伝子を挿入するにはプラスミドを使うか、高圧銃で撃ち込みます。この技術は根本的に予測不可能で、組み換え遺伝子は何十、何千という他の植物の遺伝子が発現している環境中に割り込んで行くのです。

それで、我々の研究では、2つの株を使い、全く同時に組み換え研究を行いました。栽培中2つの株は、違ってきたのです。この意味するところは、組み換え遺伝子が植物ゲノムの違う場所に入ったということです。この位置の影響を予測するのは困難です。これを理解するために、矢を的に射るウィリアム・テルを考えてみてください。彼に目隠しをするのは遺伝子研究者が組み換えするときの実態です。彼は、組み換え遺伝子が受け取るゲノムのどこに入り込むのか全く分からないのです。

10-20%の成功率で組み換えし、さらに確実にすると5%に落ちる。これらを再生してまた選ぶ。常に選ばなければならない。我々は始め隔離した実験室で組み換えポテトを育て、後にはロッテルダム郊外の土地で育てました。

ここで一言、私が騒ぎを起こしさえしなければ今頃このポテトを皆さんが食べていたことでしょう。この捜査はプシュタイ博士対ジェームズではないのです。英国国民の税金を160万ポンドかけた知識です。皆さんが払ったのです。我々は、ありとあらゆる科学的助言を受けました。我々の場合もこの情報はロウエット研究所に留まるはずだったのです。しかし、私は問題を起きました。

審査機関には12名の専門家がいきました。私は、科学的審査官達と呼びます。つまり、研究

機会もなければ結果も出さないのですから。我々は結果があり、発見したことを暴露すべきではなかったと言われてはいますが、私は今でも人間をモルモットにするのは正しくないと思っています。私は、審査官達が業界から何を得ているのか知っていました。厳格に試験されていると聞かされていますが、食べたときの安全性に関してはたった一件の論文しか公表されていません。私に言わせれば、少なくとも12件なければいけない。事実と保証は、後で嘘と分かることもある。イギリス国民の健康が掛かっている場合、疑って掛かることが非常に大切です。

1995年に我々スコットランドのダーラムとロウエットグループは、このGMポテトの研究に入札しました。これらのポテトはスコットランドと英国の市場向けだったので副食だけでも検査が必要だったのです。我々は、27グループを相手に落札しました。ここで申し上げたいのは、入札の手続きとして、この入札は専門家が審査しているということです。我々が良かったとすれば、明らかに理由があつて良かったはずです。私たちは、反栄養素 (anti-nutritional factors) の遺伝子を識別するという目的を持っていました。

虫に害があつて哺乳類には問題のない遺伝子です。ポテトの場合、害虫は、葉を食害するアブラムシ、根を食害する線虫がいます。それで遺伝子産物をいくつか試験して、昆虫を人工飼育してみて繁殖が正常か、健康か病気になるかを観ました。

遺伝子は人間に悪さをしてはいけません。ラットが哺乳類なのでラットを使いました。それも若いのを。その方が比較的小さくて弱いので悪影響がはっきり出やすいからです。ラットと人では類推するのに十分な重複があります。私の研究所は主に家畜飼育・家畜栄養研究所でして、これがロウエットの中心テーマで人間の栄養と関連があります。最近EU向けに生物学検査論文を書きました (私を首にしておきながら、私に科学論文を書かせるのですから、おもしろいものです。) 我々は、30年以上検査をしてきて、50以上の論文を發表しています。これが第一の目的で、ポテトに組み込む適当な遺伝子を探すのに7年も掛かりました。

それは、後で大きな違いが出ます。我々には、しっかりした根拠を与えてくれた研究の柱があつたので、この遺伝子から出来たものは人が食べても安全だと分かっていました。

同じ組み換えポテトから71と74という2つの株が得られ、これを親株と共に育てました。全く同じ条件で一緒に育てるのは非常に重要です。2つの株が実質的に同等であることを確認するには比較がとても重要です。実質的同等については、生物学的検査をする必要は一つもありません。作物の成分が似ていればよいのであつて、これがGM作物を認可するやり方です。しかし、実質的に同等であるわけがないのです。新しい遺伝子を、時にはいくつも挿入しているのですから。蛋白質と炭水化物と糖分含量、その他に反栄養的糖アルカロイドを調べました。

一方の株は他の株より蛋白質が20%少なかったし、他の要素も調べて、我々はこれらの2株はその親株と実質的に同等ではないと判断しました。これは予測できなかった。予測不可能なのは個々のGMプロセス毎なのではなく、組み換えの全てでのことなのです。我々のプロジェクトはここで終わるべきだったと私は思うのですが、全てのGM植物に使える新たな検査技術を開発しなければなりませんでした。

継続して給餌試験をしました。親株のポテトを与えるラット、親株のポテトプラス組み換え遺伝子産物の蛋白質を与えるラット、それと両方の組み換え株からのGMポテトで、全ての試験は同じ条件下で行いました。全てのラットは、同じ家系 (クローンではないがクローンに近いほど同系交配されたもの) で、給餌量も同じで同じ環境で飼育されました。

問題は、正常に育つかでした。もし正常に育たないとしたら、組織に何が起きているのか。通常ラットは100 gから120 gに10日で成長します。また組織は比例的に育っているか。肝臓は1 gから1.2 gに大きくなっているはずですが。肝臓が正常に育っていないとした

ら毒物の影響を示しています。脳の大きさ・機能も重要です。これらの臓器やその他も生と乾燥重量を計りました。そして、比例的に育っていないものが多いことが分かりました。

何故そうなるのか。免疫システムと機能を調べました。ここでは他で見られないものが見られます。細部まで精確に実験しました。我々は最先端研究者で不器用な素人ではありません。私は、これらのことが試験されたことのないものだったので懸念を感じていました。実験が進むにつれて懸念が大きくなって行きました。リンパ球の反応力にも異常が見られました。これは正真正銘の免疫システムへの影響で正常ではありませんでした。

私は、組み換え食品には重大な問題があると感じられる事実がありましたので、TVの世界の動き (World in Action) という番組で150秒の証言をしました。科学的論文が出るまで2-3年掛かることもあり、それまでにはこれらの食品が棚に並んでいたでしょう。私は、懸念を表明しました。その結果職を失いましたが、私は何度でもやります。

他の科学者には、何故行動規範に反して、専門家の検閲する雑誌に発表する前に話したのかと聞かれることが時々あります。私は、もし私がそうしなかったら今頃はこのポテトを食べていて、GM食品の安全は議論されなかつただろう、と答えています。

[戻る・TOPへ](#)

イギリス政府がアーパッド・プシュタイ事件の処理の間違いを認める 英国政府はプシュタイ博士が犠牲者と認めた

02年6月22日

ザ・ガーディアン（ロンドン発）

ロブ・エバンス記者

訳 河田昌東

遺伝子組換え食品の安全性について疑問を公表した「年寄りのボケた」科学者の名誉を傷つけるキャンペーンのせいで彼は犠牲者になった、と英国政府が発表した。公式のメモで、同政府当局者は政府がアーパッド・プシュタイ氏の発見に関する論争で過ちを犯したことを認め、その大騒ぎのために一般の人々のGMテクノロジーに対する信頼が損なわれた、と認めた。

72歳のプシュタイ博士は、アバーデーン大学のローウェット研究所で行った、遺伝子組換えポテトがラットに有害であるという実験結果を公表したあと、長い矛盾したごたごたの中に巻き込まれた。

政府のメモは、明日放送予定の「苦い収穫」という番組のために遺伝子組換え食品の開発過程を調査中に、ガーディアン紙とBBC放送の手に渡った。1999年7月、ごたごたが起こってから数ヶ月たった頃に、当時の農林水産省の職員らが書いたもので、「プシュタイ問題の扱いに私は懸念する。この問題から教訓を得たと私は思わない」と書いている。

プシュタイ博士は遺伝子組換えポテトをラットに食べさせると、ラットが如何に発育阻害され、免疫系が抑制されたかをテレビ番組で述べたあと、辞職するように研究所から勧告された。農水省は彼の研究結果を批判し、反対派の科学者らが同博士の仕事の妥当性を攻撃した。大英帝国の最も優れた科学者の団体である王立協会の科学者らは彼の実験を調査し、彼の試験は「実験計画や実施、分析など多くの点で欠陥がある」という声明を出した。

農水省のメモは「この固く団結した科学者の団体の見解が、弱い老科学者に対するアカデミックな予断を押しつけ、同情と公正さに基づく多くの判断を失わせた」と記している。さらに同当局者は次のように付け加えた。「後知恵だが政府はもっと別のアプローチをすべきだった」大臣達は、自分たちが彼の研究結果に関心はあるが、まだ十分な証拠が無い、というべきだった。大臣達はプシュタイ氏に「あなたの結果は食物の安全性に直接関係は無いが、懸念されるようなことが本当かどうか、あなたのやったことをもっと大規模に再現して欲しい」と言えば良かった。「そうすれば、プシュタイ博士を犠牲者にしないですんだし、反GMグループを喜ばせることも無かったはずだ」

また、別のメモで農水省当局者は「専門家の間の騒ぎが科学者の意見に対する一般の人々の信頼をさらに傷つけた」という。また、別の当局者はプシュタイ博士の発見は「GM食品反対のキャンペーンを長引かせた」という。「このことがかえって、イギリスの消費者の間に警告と疑問の雰囲気を作りだし、大手のスーパーや生産者がGM原料を使うのを止める結果をもたらした。」

しかし、ある当局者はこの「ダメージは論争によって生じたのではなく、研究そのものによって生じたのだ」と反論している。「プシュタイ氏の仕事による研究と発表を傷つけた騒ぎは、GMテクノロジーに多大なダメージをもたらした。この研究がきちんと行われていれば、何がしかの懸念と恐らくGMテクノロジーの後退をもたらしただろう。しかし、ダメージは貧弱な実験と説明不可能な結果によって起こったのだ」

農業情報研究所

刈
紙
4

[HOME](#) [グローバル化](#) [食品安全](#) [遺伝子組み換え](#) [狂牛病](#) [農業・農村・食料](#) [環境](#) [ニュースと論調](#)

インド:GMポテト給食で栄養不足、実験承認にも不備

農業情報研究所(WAPIC)

03.6.16

先日、インドが通常よりも蛋白質を多量に含むポテトを6ヵ月以内に承認するだろうとBBCが報じたことを伝えたが(インド:蛋白質増強GMポテト商用栽培へ,03.6.12)、これはシャルマを長とするバイオテクノロジー部(DBT)の独断的発表だったらしい。承認に当たる遺伝子操作承認委員会(GEAC)は、DBTまたはGMポテト開発者から大規模フィールド実験のいかなる許可申請も受け取っていないという。このことは、ヴァンダナ・シヴァ率いるニューデリーの科学・技術・エコロジー研究在団(RFSTE)が、栄養不良に脅かされている児童の栄養状態を大きく改善するためにこのポテトを学校給食に使うというDBT部長・シャルマの計画を厳しく批判したプレス・リリース([GM Potato Hoax : Future of GM Foods Rests on Lies ,11th June 2003](#))のなかで明らかにしている。

GEACは昨年、インドで初めてのGM作物となるBtワタの商用栽培を承認したが、DBTはその前年、GEACの承認を得ることなくBtワタの大規模開放フィールド実験を認めている。このとき周辺作物・植物の遺伝子汚染が問題となったが、開発研究を率いるアシス・ダッタがリードする遺伝子操作審査委員会を通じて、DBTがまた同じ違反行為を繰り返す恐れがある。

ところで、RFSTEの前記のリリースは、GMポテトにその遺伝子を組み込まれたアマランスに比べて、GMポテトの鉄・カルシウムの含有量が著しく少ないことを示している。また、蛋白質含有量は、インド各地で栽培されている様々な豆類のほうが、GMポテトと同量の蛋白質を含むと想定されるアマランスよりも多いことも示している。このことから、リリースは、GMポテトを学校給食で使えば、児童の鉄・カルシウム不足が広がり、栄養状態はかえって悪化するだろうと警告している。アマランスの遺伝子を組み込んだポテトよりも、アマランスのような作物の栽培と利用を増やすほうがずっと利口な選択だし、ともかくインドの豊かな生物多様性と料理からすれば、アマランスだけが蛋白源でもない主張する。

リリースは、このような栄養面だけでなく、GMポテトがインド農民に与える深刻な影響にも注意を喚起している。インドでは、今年、数人のポテト栽培者が過剰生産と買い手がいないために自殺している。農民は1キントルのポテトの生産に255ルピーを支出するが、40ルピーでしか売れない。ヘクタール当たりの生産費は5万5千ルピーから6万5千ルピーで、そのうち4万ルピーが種子代であった。GMポテトの導入はインド農民にとっては大災厄であり、「生産コストの増加と脆弱な市場」のために一層の自殺につながる恐れがあると言う。

なお、"The Hindu"紙は、このリリースについて触れた記事(1)とは別のもう一つの記事(2)で、GEACは13日、Rasi Seeds社のBtワタ品種・RCH-2の大規模フィールド実験をタミル・ナドゥ南部・中部の10万エーカーで承認したと報じている。他方、モンサント系のMahyco社は、既にこのGM品種の栽培実験をグジャラートで実施している。しかし、この実験用種子が不法に販売され、グジャラートの家内工業に転用されているという情報がある。GEACはこれに対して深刻な懸念を表明、既に違法行為の証拠をつかんでいるという。

GEACは、重要決定の透明性を増すために、承認の最終決定の前に最終ユーザーも含む関係者に意見の自由な表明を許す小委員会の立ち上げを決定し、また実験と検査のメカニズムを強化するための手段を提案する別の小委員会も作ったという。この記事は、GEACがGMポテト栽培実験の許可申請を受け取っていないと言っていることも確認した。

(1)'Claims on GM potato false',[The Hindu](#),6.14